読売俳壇

高野ムツオ 選

稲挙ぐや津波に呑まれかけし夢　大船渡市　桃心地

【評】大晦日は年神を迎えるため不眠が慣い。そこで寝るという言葉を忌み「稲積む」、起きることを「稲挙ぐ」と言う。うとうとした眼裏に十五年前の恐怖が蘇った。

南無六千四百柱寒土用　福島県　黒沢　正行

【評】阪神・淡路大震災は三十一年前の寒土用の入り。犠牲者は六千四百名以上。南無を戴いた漢字十文字がそのまま戒名となって立つ。震えるが十年日記書いてやる　館山市　川名　房吉

【評】寒さより高齢ゆえの震えと受け取りたい。それでも十年日記を買い求めてきた。自分を叱咤激励するように言い放った十七音が心地よい。

龍天に吾は大地に鍬を振る　八王子市　徳永　松雄

飛ぶ構えすでに解きゐて冬芒　神奈川県　石原美枝子

村棄てし人も戻りて里神楽　泉佐野市　布野　寿

日のにほひ月のしづくの凍豆腐　東京都　吉村　恵子

春の星生きているから死ねるのだ　大和市　おおもりじゅん子

蕾つぼみみな海へ向く寒椿　船橋市　中島　紺

報告は簡潔　寒の月は銀　塩尻市　神戸　千寛

正木ゆう子 選

木星をつるしてウルフムーン出づ　野洲市　宮田絵衣子

【評】狼月とは一月の満月のこと。寒さに耐えながら遠吠えを交わす狼に因んだ名という。今年は3日が満月で、木星が近くにあった。つるして、がいい。狼の威厳が表れている。

猫へ点けおきたる冬の灯へ帰る　大阪市　今井　文雄

【評】五七五の、五七と七五が両方とも句跨がりとなって、抑揚を生み、濃やかな句に。寒さ、暗さ、ほの明かり、孤独、愛情が、綯い交ぜ。

冬の灯を滑る冬の灯モノレール　東大和市　板坂　寿一

【評】煌びやかな都会の灯をよぎって、モノレールの灯が滑ってゆく。丁寧に写生しながら、灯火をどちらも「冬の灯」と表現して、シンプル。

冬耕の暮るるにまかす一人かな　神戸市　藤生不二男

雪晴のゆふべの少し蒼き町　会津若松市　安藤　和繁

メタセコイアの枝を透かして冬夕焼　東京都　西沢　康子

地ひびきを立て除雪車の凱旋す　見附市　徳橋よし子

水鳥のつくづく見ても同じ貌　土浦市　今泉　準一

鉄道の打音検査や寒昴　匝瑳市　椎名　貴寿

火の用心木の音ひとつ又ひとつ　武蔵野市　羽継原円丘

小澤　實 選

大枯野飛行機絶えず発着す　宝塚市　広田　祝世

【評】大きな枯野ではあるが、そこから飛行機が絶えず飛び発ち、着陸しているというのだ。枯野はそのまま空港になっているというわけである。近くに都市もあるのだろう。

落書きを落としし水や紅く氷る　小諸市　藤　雪陽

【評】壁などに描かれてしまった落書きを水洗いして、ようやく落とした。その大量の水が氷ったという。「紅く」という色も強烈だ。

大晦日最終列車里帰り　横浜市　池末　亮輔

【評】大晦日の最終列車に乗って里帰りをするというのだ。列車の発つ、そのぎりぎりの時間まで、都会で働き詰めなのであろう。

全身で冬至南瓜を妻が割る　宮崎市　長友　聖次

夕されば湖のねぐらへ百合鷗　京都市　吉田　基子

クレーター見えたるほどや冬の月　大阪市　農本　定成

寒灯やソースの焦げる粉もん屋　門真市　皆木多恵子

初夢やロケットに乗り帰還せず　一関市　高橋紗千子

幸福度低き国なり初日の出　東海市　斉藤　浩美

開戦日陸軍墓地に一人佇つ　広島市　大林　実

津川絵理子 選

牡蠣を割る無駄なき音を重ねつつ　仙台市　佐藤　庄陸

【評】加工場で牡蠣の殻を次々と開けてゆく。作業は手慣れたもので無駄がなく、あっという間に殻が積み上がる。牡蠣を割る音から作業場の様子が見えてくる。

白鍵の象牙の濁り雪催　松戸市　早坂　哲夫

【評】高級な象牙を使った白鍵、歳月を経て濁っている。そこに注目したところが良い。美しいけれど物憂い感じが伝わる。季語も合う。

翻車魚に正面のある寒さかな　松原市　たろりずむ

【評】図鑑では大抵横を向いているが、正面も面白い翻車魚の顔。違う魚を見ているような不思議さがあり、確かに寒そうな顔だと思う。

まつ毛より雪ひとひらのさやうなら　横浜市　菅沼　葉二

新しき水晶体や冬薔薇　東京都　関　美奈子

先生をおしくらまんぢゅして倒す　日高市　金沢　高栄

セーターを脱げば本音が漏れてくる　前橋市　西村　晃

冬日和猫の座布団干しにけり　北名古屋市　月城　龍二

老人に蓋固き瓶冬深し　東京都　天地わたる

着膨れて三人席に嵌まり込む　越谷市　安居院半樹

俳句あれこれ　藤田直子（俳人）

柚子とすみれ

〈すみれ束解くや光陰こぼれ落つ〉。二月生まれだった鍵和田柚子が三十八歳の誕生日に詠んだ句である。当時教師をしていた柚子は誕生日に、同僚からすみれの花束を贈られた。家に帰ってコップに挿そうとすみれの束を解いたとき、過去の月日が胸をよぎった。幼い頃に野のすみれを摘んだ思い出や父母への恩愛が湧いた。手からこぼれたのはすみれだが、光陰がこぼれたと表現して詩になった。光陰という語感から、すみれ束のもつ光と陰も見えてくる。

青春時代を抜けて三十代の後半になると、誰しも一旦立ち止まり、人生を大切にしたいと思い始める。その感慨が自ずと表れている。

その後も柚子は二月になるとすみれの句を詠んだ。〈鎮魂や雨の疎林にすみれ摘み〉〈すみれ濃し遠き瓦礫の鮮烈に〉。小さなすみれを通して、いのちの尊さへ心を傾けた。それは祈りの心でもあった。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭